「養蚕唱歌」を歌う
——歌に込められた養蚕立国への想いと自負

藤川琢馬（会員）

２０１４年６月、関係者の努力が実って「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録された。以後、富岡製糸場は見学者で賑わったが、このところブームが沈静化していると聞く。世界遺産としての意義は、生糸の大量生産を実現した技術革新と技術交流を通じて、かつては一部の特権階級のものであった絹を世界に広め、人々の生活や文化を豊かなものにしたということにある。しかしその意義や見学の地はそれとして、世界遺産たらしめたわが国近現代史の一面を、歌を通じて振り返ってみたい。

養蚕の技術は、古代から蓄積された経験のうえに江戸期にほぼ確立され指導書も出版されてきたが、明治以降とくに近代の科学的知見によって高められ、明治後期までに養蚕学校、養蚕業者、指導者たちにより教材が出版されてきた。わが国の開港以降養蚕の急速な振興は、明治期の国策とともに養蚕に係わった彼らの熱意、ならびに多くの養蚕農家の努力によるものである。生糸の生産量、輸出量のピークとなった昭和４年には、国内農家数６００万のうちの実に約４割、２２０万戸で養蚕が行われた。これら農家の人々を、養蚕に馴染ませるいわば副読本ともいえるのが、本稿の主題「養蚕唱歌」である。明治期西洋文明の導入のなかで唱歌教育が進められ、やがて「鉄道唱歌」をはじめとするいろいろな唱歌が歌われるようになった時代である。

『養蚕唱歌』の表紙は物語る

私の手元には、原本ではないが明治後期の『養蚕唱歌』４種がある。図書館に所蔵されている原本は、出版後ゆうに１００年を超えていて紙質劣化が激しい。「唱歌」であるので楽譜には違いないが、いわゆる楽譜ピースとは異なり、序文や歌詞の長さにより十数ページから数十ページにわたる冊子だと理解した方がいい。その中の１ないし２ページ分が楽譜である。

明治35年７月発行の『養蚕唱歌』には、全ページにわたって養蚕農家の生活や養蚕作業の光景が挿絵として描かれ、養蚕

に親しみを持たせる努力がうかがわれる。ところがこの表紙には、どういうことか中央に軍艦が、下部に蚕が描かれ（図１）、末尾のページにはラッパを吹く兵隊さんが描かれている。

　私は養蚕唱歌の歌に気を取られ、表紙の図柄には注意を払わずにいたが、あるときはたと気が付いた。生糸・絹産業は長年わが国の輸出産業の中心で、明治以来わが国の富国強兵策を支えた産業であった。蚕と軍艦や兵隊さんとは密接につながっており、この『養蚕唱歌』はそのことを意識させ、あるいは自負を物語るものであった。これが発行された明治35年は、日清戦争を経た後、２年後に日露戦争が勃発する年である。朝鮮に対する清の支配権を排除し、遼東半島の租借権を得たにもかかわらず、三国干渉により涙をのみ、国民は屈辱感を味わった。列強に伍する力が必要だと、戦争への準備に駆り立てられていたときである。

図１　明治35年7月発行『實業教育養蠶唱歌』の表紙

　この軍事費調達に生糸・絹産業がどれくらい貢献していたのか、生糸・絹産業の経済的位置づけについて見ておきたい。明治初年から戦後に至るまでのわが国の輸出品目を、財務省貿易統計によって概観してみよう（数値、図示は詳細にわたるので省略）。輸出総額に占める品目別構成比率の上位は、長期の間に茶、生糸、絹織物、綿織物、船舶、鉄鋼、…と変遷していくが、生糸は明治初年から30年代まで輸出総額の40％前後を持続して占め、さらに大正後期に至るまで30％近くを占めていて、２位以下を圧倒している。その後、昭和10年代に再び40％を超え、ピークを形成する。絹織物の輸出も、明治20年ごろから伸長し、昭和20年の終戦に至るまでの間比較的安定的に、輸出総額の５～10％を占めている時期が30～40年間続く。従って、生糸と絹織物の両者を合わせた絹産業製品は、明治初期から昭和10年代まで輸出総額のおよそ40％を保っていて、わが国の輸出が長年いかに特異的に、生糸・絹産業に頼ってきたかがわかる。わが国は開港後、茶や一部の水産品以外に輸出し得る特産品がなかった。それに代わる養蚕の振興は、官民挙げての努力が実ったものである。生糸がなければわが国は日露戦争も第一次世界大戦も戦えなかったであろう。もっとも、輸出による所得がすべて軍備拡張に使われたのではなく、西欧からの機械の輸入などにより、わが国の近代化に大きく貢献したことはいうまでもない。

　日本の生糸輸出は、ヨーロッパの蚕病や米国の絹織物業の発展という有利な海外市場条件に恵まれて始まった。絹生産工程は、蚕種から始めて蚕を飼育し繭をつくる養蚕業、繭から生糸を取る製糸工程、生糸から絹糸をつくる撚糸工程、ならびに絹糸から絹織物をつくる織布工程の４業態から成る。開港後江戸末期には、蚕種および繭の輸出が絹類輸出の40％に達していたが、その後減少して明治10年代にはごく少量になり、既述のようにもっぱら生糸の形で輸出され、米国が生糸輸入大国として登場した。明治20年代わが国は、従来の主要輸出国の中国、イタリ

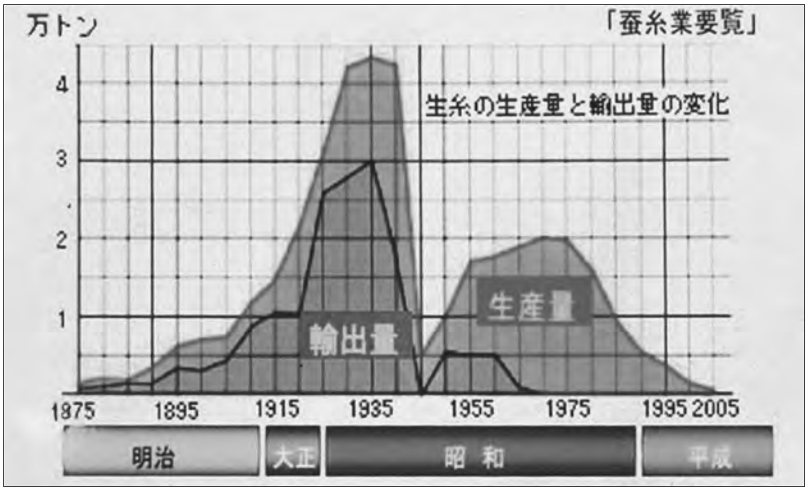


図２　生糸生産量と輸出量の変化（群馬県 日本絹の里展示より引用）

アを凌駕するようになったが、それは生糸の生産において、品質の劣る伝統的な座繰製糸から器械製糸技術の導入を進めたことをはじめとする品質改善の努力の結果であった（山澤逸平「生糸輸出と日本の経済発展」、一橋大学研究年報　経済学研究19（１９７５））。

　明治時代初期からの生糸生産量との輸出量の変遷を見る（図２）と、生糸の輸出は明治初期から増え続け、前記輸出額に反映しているように、昭和初期に最大となった。この図の生産量と輸出量との差は、国内で使用される生糸だが、絹織物として輸出されるものが含まれている。生糸は、関東大震災による被害時期を除いて、ほとんどが横浜港から輸出され、明治前半期、横浜港の輸出総額における生糸の輸出額は３分の２を占めていた時期が続いた。しかし長年月の後の昭和40年、わが国は生糸輸入国となり、現在は主に中国からの輸入に頼っている。

　わが国が国を挙げて、外貨獲得の最も重要な輸出品である生糸の生産と輸出にいかに注力したかは、その輸送網にも形跡が残されている。幕末から明治にかけて、群馬県、長野県、山梨県、埼玉県西部から絹の集散地八王子を経て横浜港につながる道は「絹の道」と呼ばれ、現在の国道16号線とほぼ同じルートである。生糸を輸送するため、まさに「シルク鉄道」といえる鉄道が整備された。高崎線（明治17年）、甲武鉄道（明治22年、現在の中央線）、上野鉄道（明治28年、現在の上信電鉄）、横浜鉄道（明治41年、現在の横浜線）、八高線（昭和９年）などである。とくに、多くの養蚕農家が出資した上野鉄道は、蚕種や繭の輸送に利用された（Ｗｅｂより）。神奈川県下の繭も、地元に製糸工場があったにもかかわらず、群馬の製糸工場に出荷された記録が残されている。

　横浜開港後、鉄道が開通するまでは利根川舟運が利用され、活況を呈していた。舟運は鉄道を補完する形で、明治、大正時代を通じて命脈を保った（若林高子・北原なつ子『水の土木遺産』、鹿島出版会（２０１７））。

絹産業関連の唄（歌）

　養蚕唱歌について記述する前に、絹産業の構造の全般に係わって、どんな歌があるのか、広く見ておきたい。全国的には多数の唄が伝えられているであろうが、太平洋に向かって門戸を開く横浜港を有し、養蚕から織布までの業態があった神奈川県下には、次のような民謡が伝わっている。

　横浜の古民謡の記録を調査・分類した報告（平野正裕「横浜の古民謡」、『市史通信』第23号（２０１５・７・７））には、仕事唄の中に、横浜が輸出港である茶のお茶場唄と並んで、糸取り（糸繰り）

唄、製糸場唄、キビソ切唄など製糸業に係わる唄が記録されている。平野氏によると、「糸をひくならヨ、太より細く、信州一番の十四中」と歌う糸繰り唄は、輸出生糸の最低品位である「信州上一番格」の細糸（十四中）づくりを目指した歌だという。糸繰り唄と製糸場唄については同じ平野氏監修・文による「横浜ふるさと歌物語」（『マイウェイ』№69、はまぎん産業文化振興財団（２００８））に楽譜が収載されている。

『かながわのうた』（神奈川県教育庁文化財保護課編・著、かもめ文庫（昭和54年））には仕事唄として、半原の管巻唄、機織唄、糸とり唄が紹介されている。同書によると、半原は農地が少なく雑穀しかとれないやせ地で、他に仕事を持たなければ生計が立たず、男は大工、女は撚糸業に従事した。撚糸女工の工賃は低く過酷な労働で、それでも信州・甲州あたりから年季奉公の出稼ぎが来ていたという。撚糸作業の一つ、管巻きは、糸束を張った紡ぎ車に似た管巻きという道具を使い、長さ20センチほどのシノ竹に絹糸を紡錘形に巻き取る作業である。機織唄は撚られた生糸で反物を織るときの唄で、糸とり唄は繭を煮て糸を引き出す準備をし、しゃくし掃きなどを使って緒糸（いとさき）を探し出し、糸巻に巻いていくときの仕事唄である（以上、『かながわのうた』による）。

これら仕事唄は、作業の単調さ・過酷さを紛らわしたり、リズムに乗って作業の効率を上げようとするもので、歌詞の多くはやや面白く、あるいは男女の機微を表現した自然発生的な唄である。従って、西洋音楽の流れをくむ教育的な創作歌曲である唱歌とは、全く異質なものである。

養蚕に係わる文部省唱歌がある。一つは明治43年発行の『尋常小学読本唱歌』に収載された「ゐなかの四季」で、現在も愛唱されている。「♪道をはさんで畠一面に～」で始まる春の情景を描写した歌詞の最後は、「♪あちらこちらに桑つむおとめ　日まし日ましに　はるご（春蚕）も太る」と歌われる。もう一つは大正元年発行『尋常小学唱歌　第四学年』に初出し昭和7年『新訂尋常小学唱歌　第四学年』においても再収載された「蠶」である。さわやかなメロディーで、5月初めから心を尽くして蚕を育ててひと月余り、その甲斐あって繭が山のごとくできた。努力すれば報われるという内容の、典型的な文部省唱歌である。

ここで、横浜・磯子区在住のギタリスト、篠崎洋子さんを紹介しておきたい。篠崎さんは長年養蚕文化の伝承に音楽で貢献する活動を行っており、養蚕の盛んだった群馬県中之条町の旧六合村と交流を続けている。平成28年10月、明治期の養蚕唱歌を甦らせようと、明治44年発行の『養蚕唱歌』を紹介した歌集・記録集『お蚕は歌う　甦れ、明治末期の「養蚕唱歌」平成の世に』を発行し、この中に養蚕に係わる自作の何曲かの歌も収載し、演奏活動を行っている。それらのうちの1曲に「富岡製糸場唱歌」がある。江戸末期以降のわが国の養蚕・製糸の歴史と意義に触れ、発展し近代化遺産となる過程を全11編の歌詞に簡潔に表現した。また篠崎さんは、絹産業遺産群の一つとして登録された養蚕学校、高山社（現藤岡市）の輝かしい貢献を、設立の歴史を含めて歌にした。なお、藤岡市には小グループながら「養蚕唱歌同好会」なる会も発足したと聞く。

唱歌の成立ちと養蚕唱歌

では、養蚕唱歌がどのような背景で作られたのか、まずわが国の近代化の出発について触れておきたい。わが国に西洋音楽が普及する入口となったものは軍楽、

讃美歌、それに唱歌であった。明治新政府は日本の近代化を推し進めるため西洋文明の導入を計ったが、富岡製糸場の設立もその一つであった。この設立年と同じ明治5年、国家発展の基は教育にあるとして、近代的学校制度を取り入れた「学制」が発布された。このなかで小学校の場合、読本や算術などと並んで「唱歌」という教科が定められたが、実際に唱歌教育が行われるようになるには明治14年の『小学唱歌集』の発行を待たねばならなかった。この唱歌集には「蛍（の光）」「蝶々」など、よく知られている歌が収載されている。

西洋音楽を耳にすることのなかった当時の児童や人々に対して唱歌に馴染ませるためには、音楽のうえで工夫があった。それは、メロディーを構成している「音階」である。すなわち、西洋音楽は長調の場合「ドレミファソラシド」でできているのに対し、日本の伝統的音楽は第4音ファと第7音シを欠いた「ドレミソラド」でできているので、唱歌が4音と7音がない音階、つまり「四七抜き音階」であれば、比較的馴染みやすかったのである。現在もなお、演歌の多くが四七抜き短調で作られており、昔も今も日本人は変わっていない。

明治末～大正初めになって、「春の小川」「朧月夜」など、現在私たちが愛唱しているいくつもの唱歌を収載した文部省唱歌集が編纂されたが、それ以前にも民間で多くの唱歌集が発行された。また、その過程に日清戦争（明治27～28年）、日露戦争（明治37～38年）が起こり、「敵は幾万」「戦友」（♪ここはお国を何百里～）など、多くの軍歌が人々により歌われた。これらは軍国唱歌といえる。軍国唱歌の多くは上述の四七抜き音階であると同時に、もう一つの特徴、それは付点八分音符と十六分音符の組み合わせが繰り返された、ちょうどピョンコ・ピョンコと飛び跳ねるように作られているリズムである。「故郷の空」（♪夕空晴れて秋風吹き～）や童謡「兎のダンス」（♪ソソラソラソラ兎のダンス～）のリズムがそれで、俗に「ピョンコ節」といい、ピョンコ節は調子がよく、単純で憶えやすいため人々に親しまれた。

学校教育から出発した唱歌は情操教育のためというよりも、多くの場合富国強兵策の一環とする教育が最大の目的で、さまざまな種類の唱歌、唱歌集が作られた。内容から分類すると、道徳・修身唱歌、偉人唱歌、歴史唱歌、鉄道唱歌、地理唱歌、産業唱歌などであり、産業奨励唱歌の代表が「養蚕唱歌」である。明治時代の輸出品の主力が生糸・絹織物だったからにほかならない。「養蚕唱歌」も四七抜き音階とピョンコ節を土台にしているものが多い。唱歌の著者（作詞者）は、児童や人々に早く養蚕に親しんでもらいたいと、必要な実地知識だけでなく、蚕業の意義、経営の心構えまで歌詞に表現し、作曲者による馴染みやすいメロディーに載せている。

入手した養蚕唱歌の概要

『養蚕唱歌』が何種発行されたか不明であるが、神奈川県立図書館には明治34年発行のもの2点、35年発行のもの1点の、3点の『養蚕唱歌』が所蔵されている。手元にあるもう1点、明治44年発行の『養蚕唱歌』については後記する。

養蚕唱歌の直接的な目的は養蚕法を教えることにあるが、4点の『養蚕唱歌』は、蚕の飼育法を説いた歌詞の主部をはさんで、前後にそれぞれ導入部と締めの部分といえる歌詞で構成されている。歌詞は七五調4句を一単位として数十番のものから百番以上のものまでが作られている。唱歌の最大ヒット曲「鉄道唱歌」（東海道編、♪汽笛一声新橋を～）が1

つのメロディー譜に対して七五調４句の歌詞が計66番もあるように、何十番もの歌詞があるということは、教育唱歌としてはふつうのことである。以下に４点の『養蚕唱歌』の概要を記す。

①『教育資料　養蚕唱歌』（明治34年１月発行）

２／４拍子、四七抜き・ピョンコ節。七五調４句×１１２番の歌詞。

序文で著者は、養蚕の中心地群馬県で生活する小学校児童に養蚕の知識技能は必須との考えから、当時「鉄道唱歌」（明治33年）など唱歌が教育資料として多く発行されているのを見て、養蚕教育の唱歌を作ったと記す。俳句・短歌を織り交ぜ、少しでも情緒を加え親しみを増させようと努力している。導入部と締めの部分の内容は次のようである。養蚕業・製糸業はわが皇国の富強を進める柱であり、父母や師の教えを守り、徳と智能を生業に注ぎ、１年を通して養蚕の学究に励み、これぞ君に忠義、親に孝の道である。かくして皇国の光は輝き、自らも花が咲こうと説く。そして上野（こうずけ）内の養蚕学校、製糸場を並べ挙げ、上野が国内随一の養蚕国であることを誇る。

著者（作詞者）と作曲者は美土里村（現藤岡市）の蚕種業者で、県内蚕糸業の要所である新町紡績所、富岡製糸場（ば）、甘楽社（かんらしゃ）、碓氷社（うすいしゃ）、交水社（こうすいしゃ）、高山社（たかやましゃ）、順気社（じゅんきしゃ）を歌詞に織り込んだ。著者は11年後、今度は一般向けに後記④の『実業教育養蚕唱歌』を公刊した。

新町紡績所（高崎市）は富岡製糸場（富岡市）と並ぶ官営の工場で、製糸に適さない繭やくず糸を紡ぐ、日本人の手で建設された最初（明治10年）の機械化大工場で、そのほかは養蚕学校である。

なお、「富岡製糸場と絹産業遺産群」として世界遺産に推薦されたのは富岡製糸場と高山社跡（藤岡市）、田島弥平旧宅（伊勢崎市）および荒船風穴（下仁田町）である。

②『養蚕唱歌』（明治34年３月発行）

２／４拍子、部分的に四七抜き・ピョンコ節を使用。七五調４句×48番の歌詞。

表紙近くの見開きに、蚕の成長図鑑がきれいなカラーで描かれている。歌詞では、飼育過程を追って注意点を与え、繭の販売、製糸場から輸出先についてまで触れた、一般農家向けの内容である。しかし、養蚕業の意義を述べる固苦しさはなく、季節に春が来、いよいよ養蚕休暇に入るという季節感と心の準備が導入部となっている。締めの部分では、いよいよ繭は製糸場に出荷され、生糸はサンフランシスコ、ロンドンへと輸出され、御国（みくに）の花と輝く。学校も再び始まった。忙しくて学業の暇がなかったが、老いるのは早いから心せよと諭す。

この『養蚕唱歌』の発行所秀英舎は現大日本印刷と思われる。出版社が企画・制作した『唱歌』で、作曲は日本最初の私立音楽学校を設立した著名な音楽家山田源一郎である。

③『実業教育　養蚕唱歌』（明治35年７月発行）

養蚕唱歌として甲號、乙號の２曲が添えられていて、めずらしい。読者が好む方で歌ってもらいたいと願っているからには、歌への入れ込みも強いのであろう。甲號は２／４拍子、四七抜き・ピョンコ節、乙號は４／４拍子、四七抜き。七五調４句×24番の歌詞。

著者（作詞者）は蚕業講習所所長で、かって２２０頁、定価50銭もの大著『蚕教』を出版し、養蚕と栽桑の方法を詳しく教えている。従ってこの『養蚕唱歌』の方は歌詞が短く簡潔で、児童にも家庭にも適切な平易な内容にしたと述べる。養蚕農家の生活情景が親しみやすい挿絵

で全13ページにわたって描かれ、生活と養蚕とが一体となっている。作曲は東京音楽学校助教授の音楽家である。

導入部では、蚕をわが子を育てるように飼えば蚕は恩に報い、生糸が後には国を護る軍艦となり晴着の紋付ともなる、と養蚕の勧めを述べる。これにより、本『養蚕唱歌』の表紙に軍艦と蚕が描かれ、裏表紙には海軍のラッパ吹きが描かれている理由が理解された。締めの部分の「繭とり」では、（家内総出で努めた甲斐あって）良い繭が取れ、（ご苦労さんと）酒・肴、子どもには団子や安倍川餅と挿絵が描かれ、努力すれば報われると諭されるが、この挿絵は何ともほほえましい。

④『実業教育　養蚕唱歌』（明治44年10月発行）

2／4拍子、四七抜き・ピョンコ節。七五調4句×131番の歌詞。

①の著者の集大成の大作で、教本の対象は①が児童、④が実業と異なるが、①と類似の構成をとる。導入部で養蚕の意義、富国の訓戒をしっかりと教え込み、中国、イタリア、フランスとの競争に勝たなければならないと説く。主部で飼育の注意点と実地の技術知識、桑や衛生管理について触れ、最後の締めで経営の心構えを述べ、国の富を増すには養蚕業に勝るものはなく、蚕種の安物買いをせず、他人や他人の桑を当てにせず、流行に乗らず、飼育法の研鑽を怠らず、家内で手堅く経営することを説いている。養蚕法においては全体として、化学的、生物学的、衛生学的知識を与えた。④は前記3種に比べて養蚕法をいっそう丁寧に説明しているが、項目ごとにそれらの要点を短歌にして記し、硬さ・味気なさを補おうと努力している。上毛新聞記載の解説によると、作曲者は高山社とのつながりが深く、高山社の養蚕法である「清温育」を反映しており、藤岡市が養蚕教育の中心だった証しという。原本は、大正3年高山社養蚕学校を卒業して養蚕の先生になった方から、旧六合（くに）村（現群馬県中之条町）の養蚕農家であった関徳三郎氏の父君がもらい受けたもので、前記篠崎洋子さんから紹介されたものである。

①～④のいずれの著者も特徴が出ていて、互いに模倣的な感じはない。

養蚕唱歌は歌われたか

明治時代は知識の時代といわれる。西洋の技術・知識の導入に国を挙げて注力した一方の、国内の基盤固めの一つは学制の発布・整備であったが、「唱歌」がその結果生まれたことは既述した。養蚕唱歌は地理唱歌などと同様教育目的であるので、教えるべき知識を入れ込むためにはそれだけの長さの歌詞が必要である。66番あった「鉄道唱歌」（東海道編）が人気を博し、日清・日露戦争により隆盛した軍歌はそのストーリーが10番、20番になることもよくあることだった。

歌詞の長さに関しては、その時代はまだ伝統的な、いわば「耳の文化」というべき時代にあった。現代は文字や画像を見る「目の文化」といえる。盲目の瞽女（ごぜ）さんが何時間もかかる「段物」を演じ、村人がじっと耳を傾ける社会が生きていた時代であり、「軍人勅諭」（明治15年）や「教育勅語」（同23年）の暗唱や奉読がなされた時代である。この文化は歴代天皇の名をそらんじた終戦まで続いた。

だからといって、何十番もある養蚕唱歌が何十番も歌われただろうか。「鉄道唱歌」や「軍歌」のストーリーに比して、知識技能を教えることが目的の「養蚕唱歌」の歌詞は決して面白くはない。『養蚕唱歌』①の著者は序言において、その土地に生活するうえで必須な知識技能を授ける必要性を説く一方、「此書歌詞冗長に過ぎ児童をして一々唱記せしむべか

らず」とも「実事に重きを置きたれば風韻に欠く」ともいっている。③の著者は、「平明典雅なる辞藻を…優美快活な曲で歌えば自然と養蚕の基礎が身に着く」と述べる。④では、養蚕法を「七五の調に整へ、同窓の八木沢道三に作曲を乞ひ、独り竊かに唱歌しつゝありしに、偶々、知友の来るありて、これは面白し摺巻として人に頒たば益する所多からん是非に是非に」といわれて公にしたという。著者たちは、唱歌を無理やり暗唱させることまでは要求していない。養蚕唱歌の歌詞は七五調に整えられている。この定型は、日本語の言葉が心にすとんと入ってくる最も優れた形式で、一般に唱歌や歌の歌詞は七五調でできているものが多い。一番の目的は、歌にすることで養蚕に親しみが増し、歌っていれば自然に覚えられるという考えである。

次に養蚕唱歌のメロディーに関して、これを考えるヒントは「鉄道唱歌」（東海道編）である。親しみやすく、繰り返し歌っても飽きが来ない、優れたメロディーが付せられているかどうか。「鉄道唱歌」の場合、多梅稚の作曲と、ほとんど知られていない上眞行の作曲とがあり、両者ともヨナ抜き音階だが、広く歌われているのは多梅稚作品である。多梅稚の曲は2拍子のピョンコ節で調子がよいうえ、比較してより近代的で、移動ド音を中心に低音から高音までのメロディーの流れがスムーズで変化も多く、山場がありダメ押しの山場もある。ひるがえって『養蚕唱歌』①～④（全5曲）はどうであろうか。単純な曲ほど作るのが難しいものである。③には甲乙2曲の楽譜が収載され、著者は前記したように、優美快活だと自賛している。本稿では全5曲の紹介はできないが、おおかたの評価はどうだっただろうか。

ではどれくらい多くの人が『養蚕唱歌』を手にしただろうか。④の著者は再版序において、「明治44年に発行して以来、半年も経たぬうちに初版が尽きて、…発行部数が多くないにせよ、…再版の申込さえ200部に達するに至ろうとは予期しなかった」と述べている。明治末頃の養蚕農家戸数は150万戸程度で（大正6年186万戸の統計数値あり）、そのうちのたとえば1%近くが『養蚕唱歌』の所持者になったととりあえず考えるのでは、東京の出版社も発行し産業奨励唱歌というジャンルがあったということにしては少なすぎるであろうか。明治30年頃の1円は現在の2万円に相当するといわれ、『養蚕唱歌』の値段（①～④の定価は5～8銭と表示されている）は現在の1000～1600円となり、安くはない。高山社など養蚕学校等を通じて販売されたケースも多かったのではなかろうか。

養蚕唱歌はやさしい歌であっても、民謡の仕事唄と違って仕事中に歌うものではないし、一般の人々や児童はおおかた楽譜を読めず、聞き覚えでしか唱歌は歌えないのが実情であろう。それに、指導者についても五線譜を読める人はめったにはおらず、養蚕学校で特定の養蚕唱歌を教え歌わせたということは考えにくい。私には、『養蚕唱歌』は養蚕の常識を与える実用書ではあるが、国の経済を支えている養蚕への誇りと貢献している自負とを与え、『養蚕唱歌』を所持することは、社中の連帯と精進の証しであると感じることが最大の価値だと思っている。

養蚕唱歌を歌う

前記4点5曲の養蚕唱歌に対し、その出来栄えに甲乙をつけることは難しい。私は、これらの曲を何度も歌っているうちに、次第に愛着を感じるようになっている。

本稿では養蚕唱歌の実際として、歌詞

については明治34年1月発行の①から冒頭と末尾の一部を、曲についてはメロディー的に比較的変化のある明治35年7月発行の③甲號の楽譜を紹介しておきたい。

（付記）富岡製糸場等の世界遺産保存・活用推進事業の一環として、平成28年6月26日上毛新聞社は「絹の詩(うた)」の作品募集とともに、「地域に残る絹の歌」の発掘を朝刊紙面から読者に呼びかけた。その社告の前日、私は群馬県水上市で開催された、首都圏の貴重な水源を讃え護っていこうと謳う合唱組曲「利根川源流讃歌」を歌う大きな会に参加していた。この組曲の作詞者で、大会実行の代表者である群馬県の知人から、イベントの記事が翌日の朝刊に載ることを聞き、帰路に購入して、私はこの社告を偶然目にした。後日新聞社に『養蚕唱歌』の情報提供をして、わずかながらお役に立つことができたが、本稿の出発は、その偶然からによるものである。（平成29年12月記）

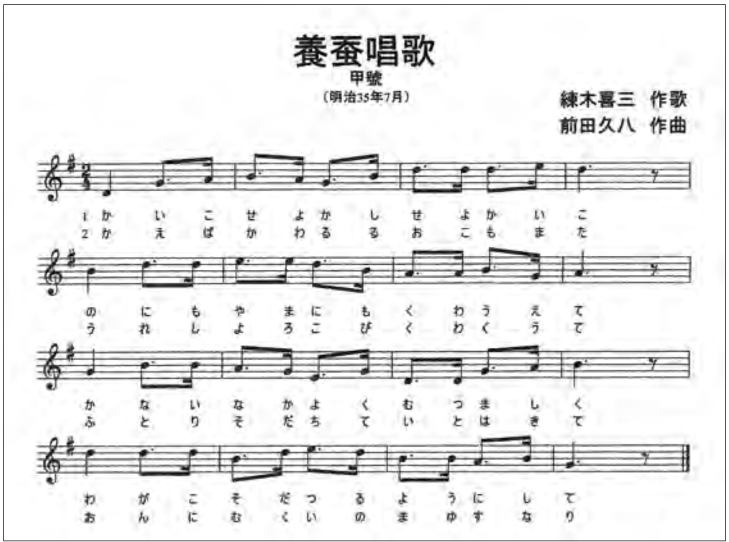
明治34年1月発行『養蚕唱歌』から

瀧上豹三郎作詞

1　昇る旭日と諸共(もろとも)に
皇国(みくに)の光を輝かす
道は数多(あまた)ぞ敷島(しきしま)の
日本錦(やまとにしき)を綱(つな)にして

2　世界の富を引き寄する
芸(わざ)に励(はげ)むも其道(そのみち)の
一(いつ)と悟(さと)りて尽(つく)すなる
養蚕業に製糸業

3　改良進歩の功(こう)を積み
輸出の高(たか)を日に増して
皇国(みくに)の富強を図(はか)るこそ
皇国(みくに)の人の務(つとめ)なれ

111　学理を究(きわ)め実験(じっけん)を
積みて飼育に勉(つと)むべし
是(これ)ぞ御身等(たみら)が君(きみ)に忠(ちゅう)
親には孝を尽す道

112　道を務(つと)めて撓(たゆ)まずば
皇国(みくに)の光輝(かがや)かし
我が身にも亦(また)花咲かん
勉(つと)めよ励(はげ)め稚児櫻(ちごさくら)